気配

韮澤実月

技法：デジタルイラストレーション・オフセット印刷・浮き出し加工，用紙：アラベール
F-FS スノーホワイト四六 160 kg，サイズ：12.8×18.2 cm

見えない世界の気配

韮澤実月

在学時から、妖怪を題材に制作を続けているが、いまだに一度も、そういった類の姿を目にしたことはない。

それでも、調査のために訪れた地で、例えば、葉が落ちて見通しの良い木立の中、1本の木だけが不自然に揺れた…というような、何かの「気配」を感じた体験は、しばしばある。

「気配」は、輪郭を持たないが質量があり、目には見えない存在を認識させる。

妖怪とは往々にして、常には実体を持たず、可視と不可視を行き来する曖昧なものだ。制作においては、そうした彼らの不確かな姿を、民話や伝承の中の描写、あるいはその土地の文化や環境といった情報を素材として、自身の中で組み合わせ、目に見える形に描き起こしている。

そんな折、浮世絵師・月岡芳年（1839-1892）の大判錦絵《新形三十六怪撰 さぎむすめ》に、あらためて目が留まった。

同作品では、「空摺り」と呼ばれる、絵具を使わずに版木の形のみをエンボス状に印刷する技法を用いて、白無垢の模様や鷺の羽毛を表現している。空摺りは主に、着物の柄や無色のモチーフの表現に見られるが、同じような浮き出しの技法で妖怪を描くことで、透明だが確かな厚みを持つ、あの独特の「気配」を表現することができないかと考えた。

試みにあたって題材には、「火車」を選んだ。火車は一般的に、化け猫の一種と云われ、人間の亡骸を攫う妖怪として知られている。私たちの世界と妖怪たちの世界、二つの世界の分岐点を生と死と仮定し、より直接的に生者と死者に関わるものを基準に、取り上げた。

作品では、一見すると、少女の抱いた猫が蝶々に向かって手を伸ばしている場面に見えるが、光を当てると、浮き出し加工で表現された火車の存在に気が付く仕掛けになっている。

火車の容姿は、過去に鳥山石燕（1712-1788）の妖怪画を参考に描いた自作の、猫の柔軟な身体と、シュリーレン現象を通して見た物体のイメージを掛け合わせたものを土台とした。少女や猫とは異なる幾何学的な形は、此岸と彼岸の対照性を意識している。また、三角形、円、直線、曲線といった様々な図形を、粗密の緩急を持たせながら配置することで、受け手が作品に触れたとき、部位によって手触りに変化を感じるよう、触覚面からも「気配」へのアプローチを試みた。

妖怪がもたらす「気配」は、彼岸という見えない世界の存在をほのめかす。彼らに対して私たちの多くは恐れを抱くが、その一方で「死の先」の可能性には、不思議な安堵も覚える。

人間と妖怪は、きっとこの先も、この奇妙な二面性を抱えた関係性を保ち続けるだろう。物理的には何処よりも遠く、精神的には誰よりも近いその距離感を、引き続き描いていきたい。